

地域子育て支援活動における専門職の役割

— A県地域子育て支援センター職員を対象とした調査—

杉山 泰子, 國分 真佐代, 鈴木 隆弘, 橋爪 永子, 杉本 陽子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

原著論文

地域子育て支援活動における専門職の役割

— A 県地域子育て支援センター職員を対象とした調査 —

杉山 泰子, 國分 真佐代, 鈴木 隆弘, 橋爪 永子, 杉本 陽子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

キーワード： 地域子育て支援, 職員, 気になっていること, 課題, 困難, 専門職, 役割

要 旨

近年、核家族の増加や近隣との希薄化などにより、子育ての経験や知恵を共有することが困難となっている。平成 19 年より厚生労働省は、子育て支援の拠点施設（地域子育て支援センター）を整備し、子育てを地域で支える取り組みに大きな役割を果たしている。本研究は、地域子育て支援センター職員の、利用者との関わりの中で気になっていること、および、利用者を支援していく上で課題や困難と感じていることを明らかにし、地域の子育て支援活動における専門職の役割を考察することを目的とした。

A 県地域子育て支援センター職員を対象に調査した。同意を得た施設の 166 名に自記式質問用紙を郵送し、回収した。自由記述内容を質的記述的に分析した。

職員が利用者との関わりの中で気になっていることは、『目の前の気になる親の姿』、『職員の行う支援』、『利用者と職員の認識の違い』、『実際には見えない母子』であった。職員が支援を行う上で課題や困難と感じていることは、『組織の意義・運営のあいまいさ』、『利用者の個々に応じた支援』、『職員の資質と就労環境』、『見えない母子へのアプローチ』であった。

これらの結果より、専門職者の役割は、来所しない親子への支援方法を職員とともに検討していくこと、職員のためのスキルアップ研修を開催していくこと、職員の持つ当事者性を尊重することではないかと示唆された。

1. はじめに

近年、地域では、核家族化や地域のつながりの希薄化などにより、子育ての経験や知恵を共有することが困難となっている。総人口に占める子どもの割合は年々低値を示しており¹⁾、諸外国と比較してみても、わが国が最も低くなっている²⁾。さらに、子育てに孤独感を抱える保護者の増加³⁾、養育力の低下⁴⁾など、さまざまな課題の対応が求められている。

厚生労働省は、児童福祉法にもとづき、平成19年より地域子育て支援拠点事業として、各市町村において子育て支援の拠点施設（地域子育て支援センター）を整備した。これは、親子で交流できる集いの場として現代の子育てに大きな役割を果たしている⁵⁾。A県での地域子育て支援拠点事業実施か所数（子育て支援交付金交付決定ベース）を見ると、平成20年の調査では95か所であり、地域子育て支援センター1施設当たりの0～5歳人口は、少ない市町では229人/1施設、多い市町では2196人/1施設であった⁶⁾。平成26年度では109か所と事業実施か所数の増加が見られているが⁷⁾、この施設数からはA県内のすべての子どもとその家族が気軽にサービスを受けられる設置状況ではないと思われ、利用者、職員ともに様々な困難や課題を抱えていることが考えられる。

先行研究においては、利用者を対象にしたニーズやストレスの調査は多く見られるが、職員を対象とした研究は散見される程度であり、職員の抱える困難や課題などは調査されていない。養育者の背景が様々であり子育て環境が複雑化していることから⁸⁾、利用者のニーズは、従来求められていた内容のみに留まらない可能性もあり、それにとともに職員の悩みも多様化していることが推察される。専門職が職員支援をすることは、多職種連携で子育て支援活動を行うことにつながり、意義のあることと考える。

したがって、本調査よりA県地域子育て支援センター職員の、利用者との関わりの中で気になっていること、および、利用者を支援していく上で課題や困難と感じていることを明らかにし、地域子育て支援活動における専門職の役割を考察する。

2. 方法

1) 研究デザイン

地域子育て支援センター職員が、利用者を支援していく上での経験や思いを、本人によって記述された言葉を使って解釈することが必要と考えたため、質的記述的研究デザインを選択した。

2) 研究協力者および調査方法

A県内の地域子育て支援センターに勤務している、研究同意の得られた職員を対象とした。A県内の地域子育て支援センターすべての施設に調査を依頼した。同意の得られた施設の職員に、自記式質問用紙を郵送にて配布・回収した。

自作の質問用紙を用い、データを収集した。主な質問内容は、利用者との関わりの中で気になっていること、利用者を支援していく上で課題や困難と感じていることとし、自由に記述していただいた。また、年齢、性別、勤務形態、勤続年数、専門資格についても質問した。

3) データ収集期間

平成26年12月～平成27年1月

4) 分析方法

自由記述で得られたデータを、意味を理解するまで十分繰り返し読み、データから含まれる意味を読みとり、1つずつその意味を導き出しコード化した。作成されたすべてのコードを互いに比較しながら、同じような特徴を持ったコードをまとめていき、まとめたものにその特徴を示す名前をつけ、サブカテゴリーを抽出した。各研究協力者から得られたサブカテゴリーの特徴と共通性を吟味し、カテゴリー、コアカテゴリーを抽出した。母性看護学・小児看護学の専門家5名で分析内容の信頼性を検討した。

6) 倫理的配慮

調査実施にあたり、鈴鹿医療科学大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 204）。

3. 結 果

1) 研究協力者の背景

同意を得た 56 か所の施設の 166 名の職員に質問紙を配布した結果、回答数は 124 名、回収率は 74.7%であった。すべて女性であった。職員の年齢は、ほぼ 35 歳以上の方で占めており、55～59 歳が最も多かった。20 代は 3 名であった。平均年齢は 50.4 歳であった（図 1）。勤務形態は、常勤が 53.2%，パートが 44.4%であった。勤続年数は、5～9 年の方が最も多く、平均勤続年数は 3.9 年であった（図 2）。専門資格については、保育士 108 名、幼稚園教諭 49 名、看護師 4 名であった。資格なしの方は 6 名であった（図 3）。地域子育て支援センターは、35 歳以上で保育士・幼稚園教諭免許を所有する方が、業務を担っているという特徴があるといえる。

2) 利用者との関わりの中で気になっていること

利用者との関わりの中で気になっていることの自由記述において、105 名の記述があった。230 コードからサブカテゴリ 36 個が抽出された。36 個の各サブカテゴリの特徴と共通性を吟味していく過程において、自由記述の中に「目に見える現実に関する気がかり」と「見えない状況への気がかり」、「自身と利用者との関わりから生じる気がかり」が含まれていることに注目した。そして、これらが関連していることにもとづき抽象的・概念的にまとめ上げ、10 のカテゴリ、4 つのコアカテゴリを抽出した（表 1）。4 つのコアカテゴリに分けて以下に述べる。利用者との関わりの中で気になっていることを構成するコアカテゴリに『 』、カテゴリに【 】, サブカテゴリに《 》, 具体的な意味を象徴する研究協力者の記述に「 」をつけて示す。

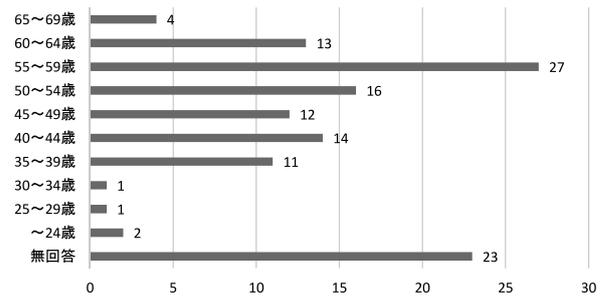


図 1 職員の年齢 n=124

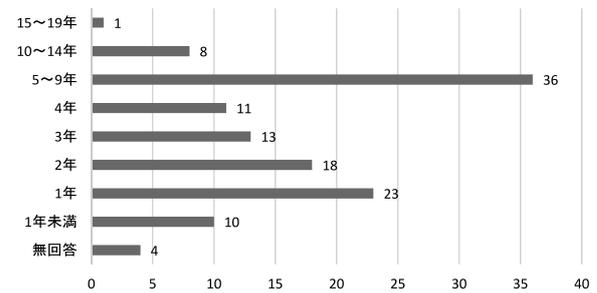


図 2 子育て支援センター勤続年数 n=124

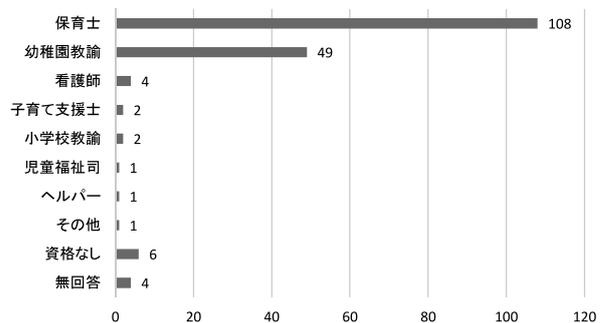


図 3 専門資格について n=124 複数回答

(1) 『実際には見えない母子』

『実際には見えない母子』は、【利用者から見えてくる社会状況の変化】、【利用しない親の支援】の 2 つのカテゴリで構成される。

研究協力者は、支援に関わりながら【利用者から見えてくる社会状況の変化】を察知していた。

「親も一人っ子で、その人が第 1 子を育てるので、小さい子とのかかわりがない方が多く、こんなことも？と思う子どもとのかかわり方を教えなくてはいけないことが多い。知らせたことを素直に取り入れ、子育てがス

表1 利用者との関わりの中で気になっていること（自由記述）230コード

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	
実際には見えない母子	利用しない親の支援	支援センターに来れない人への支援 0才、1才が多く、2才以上が少ない 急に来なくなった人への支援	
	利用者からみえてくる社会的状況の変化	シングルマザーの増加 子どもの数が少ない	
目の前の気になる親の姿	気になる母親の姿	身近な支援者がなく、一人で育児をする親 自信のない親、思い悩む親 疲労の強い母 笑わない母 母の言葉づかい 気軽に相談できない親 自分のことを認めてほしい母	
		気になる親の育児	子育てにすぐに答えを求め、インターネットに頼る親 親の適切でない育児技術、しつけのしかた 子とのかかわり方、遊び方がわからない親 戸外で遊ばせない親 適切なしつけのできない親、叱れない親 親としての自覚の低さ 父親の育児参加を望む母 親とのやりとりが少なく子どもの発達が遅れぎみ
			子どもをみない母親の姿
	利用者のマナーやトラブル		マナー、ルールが守れない利用者 親同士、子ども同士の関係性のトラブル 利用者のグループ化
	利用者と職員の認識の違い	親の求めるニーズ	利用者の相談内容や要求の多様化 親からみた、子育て支援センターと託児所の区別のあいなさ
		利用者の認識とのギャップ	親からみた、子育て支援センターの意義・目的 利用者や職員の育児に関する常識のギャップ
職員の行う支援	親とのかかわり方	職員の対応が、利用者のニーズと合致しているか すべての利用者に平等に、丁寧に関わっているか 利用者のニーズに合っているか 人の輪の中に入りにくい利用者への関わり方 発達が気になる子の保護者との関わり	
		職員の支援の質	指導者の人員確保、人手不足 職員の知識、専門知識、他センターの状況把握の不足

ムズになり、子ども自身の発達もぐっと伸びる事が多く、やりがいを感じるが、センターに参加せず、家にいる方はどうしているのだろうかと心配になる。」

上述のように研究協力者は、利用者に関わることにより《子どもの数が少ない》、《シングルマザーの増加》など、子育てをとりまく社会状況を把握し、来所しない親子の生活を懸念していた。

「支援センターにせつせと遊びに来てくれていた方が、パタッと来なくなるとその後どうされているのだろうか気になる（特にお母さんが不安定な方など）。」

このように、育児不安や精神不安を背景に、《支援センターに来れない人への支援》や、《急に来なくなった人への支援》など、【利用しない親の支援】についても関心を持っていた。

これらのことから研究協力者は、『実際には見えない母

子』を、支援の必要な存在としてとらえていることがわかる。

(2) 『目の前の気になる親の姿』

『目の前の気になる親の姿』は、【気になる母親の姿】、【気になる親の育児】、【子どもを見ない母親の姿】、【利用者のマナーやトラブル】の4つのカテゴリーで構成される。

【気になる母親の姿】は、《身近な支援者がなく一人で育児をする親》、《気軽に相談できない親》、《疲労の強い母》、《笑わない母》、《自分のことを認めてほしい母》、《自信のない親、思い悩む親》などで構成される。《自信のない親、思い悩む親》を示す記述について、現代の育児の特徴と思われる以下の記述があった。

「子育ての悩みをインターネットで調べ、ますます悩む人がいる。ネットがすべてで、自分の子どもと向き合うことをせず、人の助言を受け入れられない様子が心配。」

このように、ネット社会という背景が育児に影響し、母親の情緒面に表れているという記述内容が多い。

【気になる親の育児】は、《親の適切でない育児技術、しつけのしかた》、《子との関わり方、遊び方がわからない親》、《戸外で遊ばせない親》、《親としての自覚の低さ》、《親とのやりとりが少なく子どもの発達が遅れぎみ》などで構成される。研究協力者はこのような状況に対し、子育てや保育に関する知識と技術を活かし、主体的に支援している様子がうかがえた。

【子どもを見ない母親の姿】は、《母親同士のおしゃべりに夢中で子どもを見ない母親の姿》、《子どもをみずに、スマホを持つ母親の姿》で構成される。利用者に、親同士の交流をしてもらいたい気持ちや、リラックスして過ごしてもらいたいという願いが研究協力者にはあるものの、利用者の子どもを全面的に面倒見なければいけないという状況に疑問を感じている様子がうかがえた。

【利用者のマナーやトラブル】は、《マナー、ルールが守れない利用者》、《親同士、子ども同士の関係性のトラブル》、《利用者のグループ化》で構成される。

「お子さんを勝手に遊ばせておいて見守ることもなく他のお母さんと喋っていて自分のお子さんが他のお子さんとトラブルを起こしていても全く気付かないお母さんがたくさんみえる。」

上述のとおり、利用者が場面を見ていないことにより、さらなるトラブルを引き起こし、利用者同士の関係性が悪化することもある。さらに、利用者同士の派閥という記述もあり、研究協力者は、目に見える多くの気がかりを抱えながら支援をしていることがわかる。

(3) 『利用者と職員の認識の違い』

『利用者と職員の認識の違い』は、【親の求めるニーズ】、【利用者の認識とのギャップ】の2つのカテゴリで構成される。

【親の求めるニーズ】の特徴的なものとして次のような記述がある。

「近隣の市町の子育て支援施設を上手にわたり歩いている利用者さんも多く、情報を流してくれるのですが、プレゼントなどで各施設を比べている人もいて、本来のあり方はどうなんだろうと疑問に思う事もあります。」

「普段家でしていることでも、センターに来ると誰か職員がしてくれると思うのか、頼まれることが多いように思います。これは親が行っていく事、これは支援していく事だと、その区別が難しい。」

これらの記述のように、《利用者の相談内容や要求の多様化》、《親からみた、子育て支援センターと託児所の区別のあいま》を感じながら支援をしていることがわかる。

【利用者の認識とのギャップ】に関し、次のような記述がある。

「あたりまえと思っている事でも（これだけメディアが発達していて知識として知っていると思われる内容でも）知らないことが多い。」

上述のように、育児に関する情報は膨大にあっても、利用者の知識はないことを実感し、《利用者と職員の育児に関する常識のギャップ》を感じている。また、次のような記述もある。

「2人の子育てに疲れてセンターで上の子を遊ばせてあげたい方、初めての子育てで不安そうに赤ちゃんを抱っこされている方、遠方からみえて知り合いがないため、ママ友を探しに来られる方。その一方、ラインなどでお友達を集めて陣取ってしまう方、お友達同士で子どもを預けて少しの時間外出をされてしまう方。子育て支援センターの利用目的が様々で、利用される方によりセンターの雰囲気が変わってしまうことが少し気になります。」

上記の記述から、《親からみた子育て支援センターの意義・目的》にギャップを感じていることがわかる。「利

用者との関わりの中から、子育て支援とは何か、と考えさせられる」といった記述も少なくなく、『利用者との職員の認識の違い』に気がかりを感じていることがうかがえた。

(4) 『職員の行う支援』

『職員の行う支援』は、【親とのかかわり方】、【職員の支援の質】の2つのカテゴリで構成される。

【親とのかかわり方】は、《職員の対応が、利用者のニーズと合致しているか》、《すべての利用者に平等に、丁寧に関わっているか》などで構成され、利用者の満足度が向上する関わりを意識していることがうかがえる。また、《人の輪に入りにくい利用者への関わり方》、《発達が気になる子の保護者との関わり》など、配慮を要する利用者への専門的な支援について気がかりを感じているといえる。

【職員の支援の質】は、《指導者の人員確保、人手不足》、《職員の知識、専門知識、他センターの状況把握の不足》で構成される。《指導者の人員確保、人手不足》は、事業内容の工夫が必要であることはわかっているが、人員不足により実行できない現実が記述されていた。《職

員の知識、専門知識、他センターの状況把握の不足》は、有資格者でないことによる知識の不足を感じているという記述や、時代の変遷により離乳食や予防接種などの新たな学習の必要性などの記述があった。

3) 利用者を支援していく上で課題や困難と感じていること

利用者を支援していく上で課題や困難と感じていることの自由記述において、109名の記述があった。218コードからサブカテゴリ20個が抽出された。20個の各サブカテゴリの特徴と共通性を吟味していく過程において、自由記述の中に「組織」と「気になる利用者」、「職員自身」が関連していることに注目した。そして、これらの関係にもとづき抽象度を高め、8のカテゴリ、4つのコアカテゴリを抽出した(表2)。4つのコアカテゴリに分けて述べる。

(1) 『組織の意義・運営のあいまいさ』

『組織の意義・運営のあいまいさ』は、【関係機関との連携】、【施設としての運営の限界】、【子育て支援セン

表2 利用者を支援していく上で課題や困難と感じていること(自由記述) 218コード

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
組織の意義・運営のあいまいさ	関係機関との連携	関係専門職・専門機関との連携
	施設としての運営の限界	職員の人員確保
		父親と子どもだけの利用がしづらいイメージの払拭
		施設としての運営方法の限界・制限
		安全性の確保、他の子どもへの危害
	子育て支援センターの意義・目的のあいまいさ	利用者に合わせてアドバイス、介入方法、関わり方
		子どもをみない親への関わり方
職員による支援の差		
子育て支援センターの意義・目的の模索		
見えない母子へのアプローチ	見えない母子へのアプローチ	利用していない人の支援
		来なくなった人へのフォロー
		長期的支援の必要な子どもに対する継続的な支援
利用者の個々に応じた支援	個々への対応の難しさ	発達の気になる子どもの親への対応
		相談に対する回答への責任
	介入しづらい利用者への支援	マナーを守れない利用者
		外国人とのやりとり
職員の資質と就労環境	職員自身の就労環境	職員の健康保護
		職員間の人間関係
	職員の技術、知識の不足	親とのコミュニケーション、傾聴、わかりやすい説明
		専門知識の不足

ターの意義・目的のあいまいさ】の3つのカテゴリーで構成される。

【関係機関との連携】については、積極的に行っている施設もあるが、未連携の施設も多い。

「一部の子供について職員が発達に不安を感じる場合があるが、支援センターの立場上、そういった助言は難しい。そのため、専門的な知識がある方に気軽に相談できる機会を作っていけたら良いのではと考える。」

この記述のように、子どもの発達が気になる場合や、母の精神的不安定な場合など、支援方法に困難を感じているという記述があり、《関係専門職、関係機関との連携》を望んでいる。

【施設としての運営の限界】は、《父親と子どもだけの利用がしづらいイメージの払拭》、《安全性の確保、他の子どもへの危害》に困難を感じている。また、《職員の人員確保》や、《施設としての運営方法の限界・制限》についても記述されている。

「利用する親子が楽しめるイベント等を計画してゆくことが課題の一つだと考えるが、講師料の予算がほとんどないことが困難だと感じている。現場の職員は日々支援センターの必要性や課題、また支援方法について話し合うことができるが、経営者側にはその声がなかなか届かないことが困難だと感じている。」

これらの記述から、人員の確保、設備・備品の確保に関する困難だけでなく、現場にいる職員と経営者との間に距離があるという困難さもうかがえる。

【子育て支援センターの意義・目的のあいまいさ】については、以下の記述がある。

「利用者の母が自分の子どもを保育士と遊ばせたい気持ちが強く、ほぼ毎日のように来所するが、センター開催時間中（朝来所し、昼食をとり、センター終了時間まで）、利用して、そのあいだ保育士がその母の子

どもと関わるとなると、母は1日のうちで、いつ自分の子どもとゆっくり関わるのか？親子関係をしっかりと築かなければならない時期に、母が関われる環境にあるにも関わらず、大切な時間をうばうことになっていないか。保護者の気持ちを大切に、受けていきたいが、どこまで受けていいのか難しいと思う。」

上述のように、子育て支援が親子関係の築きを阻害しているのではという思いが研究協力者にあり、《利用者に合わせてアドバイス、介入方法、関わり方》や、《子どもをみない親への関わり方》に困難を感じている。また、次のような記述もある。

「二人体制でやっているので毎日気になっていることをお互い話し合っているのではぼわかり合っているが、方針を同じくしていくことが大切だと思う。しかし、子どもを迎える段階で、皆、どの子にも同じ態度でやっている私と、両手を広げて「いらっしゃーい！」と何人かの子にやっているもう一人の先生がいるのでどうしたものかと思いつつ、言えないでいるのが現状です。」

特定の親子に支援がいき過ぎないように努力している一方、特定の親子を意識しすぎている職員という《職員による支援の差》にも困難を感じている。

「子育て支援の定義というか、基本的な部分は同じというか1つ?にもかかわらず対応がそれぞれなので、理念と現場での意識の持ち方に違いがあると思う。もっともっと向上や努力改善などの必要性がある。」

この記述のように、理念は掲げていても現状はともなっておらず、《子育て支援センターの意義・目的の模索》を課題としている。このように、研究協力者は【子育て支援センターの意義・目的のあいまいさ】を感じてはいるが、利用者が来所することにより、親子で共に楽しむ時間を過ごし、育児の喜びを感じてほしいという願いがあることがうかがえる。

(2) 『見えない母子へのアプローチ』

『見えない母子へのアプローチ』は《利用していない人の支援》, 《来なくなった人へのフォロー》, 《長期的支援の必要な子どもに対する継続的な支援》から構成される。

「支援を要する親と子どもを長い目で見ていきたいと思っ
ても支援センターは必ず来なければならないところではないので来なくなってしまうことがある。」

上述のように, 《長期的支援の必要な子どもに対する継続的な支援》が課題と感じており, 来なくなった親子も支援の対象であるという意識を持ち, 個別的に長期的に関わろうとしている姿勢が見られる。

(3) 『利用者の個々に応じた支援』

『利用者の個々に応じた支援』は, 【個々への対応の難しさ】、【介入しづらい利用者への支援】の2つのカテゴリで構成される。

相談内容によっては専門性が必要な場合があり, 《相談に対する回答への責任》を感じている。また, 次のような《発達の気になる子どもの親への対応》の困難さを示す記述もあり, 【個々への対応の難しさ】に困難を感じている。

「発達の的に課題があると思われる子に対して, 専門機関に相談に行くことをすすめることがむずかしい。母から相談があれば紹介できるが, 信頼関係がつくまで話出せない。又, 母のメンタル的な問題に対しても話は聞けても専門機関につなげていくことが難しい。」

【介入しづらい利用者への支援】では, 《外国人のやりとり》に対し文化の違いによる困難さがある。また, 次のような記述もある。

「大人数(親子10組)で仕出し弁当を持ち込み, 禁止しているお菓子類(ドーナツなど)を広げて仲間だけで騒ぐ。他利用者からの苦情があった。」

このように, 《マナーを守れない利用者》がいる現状に課題を感じるという記述もある。

(4) 『職員の資質と就労環境』

『職員の資質と就労環境』は, 【職員自身の就労環境】、【職員の技術, 知識の不足】の2つのカテゴリで構成される。

「利用者にとって居心地がよく, 何でも話せる場を目指して行く中で, 相談内容が子どもに関するだけでなく, 多様化してきているのが現状で, 受ける側(私自身)のメンタルが健康で強くなければ相談者と共に気持ちが落ちていってしまう時があります。」

上述のように, 精神面での《職員の健康保護》に課題があることがうかがえる。また, 《職員間の人間関係》に関する記述もあった。このように, 【職員自身の就労環境】に課題や困難がある。

【職員の技術, 知識の不足】にも課題を感じている。最新の知識や情報, 発達に関する知識など, 《専門知識の不足》を感じている。また, 単に専門知識のみではなく, 支援者としての資質の向上を課題としている次のような記述もある。

「保護者の方のマナーやモラルがかなり欠けている方が多く感じるので, 支援する上で, 保護者の方の自信を育てていくような, 学びの場が必要であると思う。しかし, そのまま研修のような形では, 今の方たちは嫌がり, 参加されないと思うので, そこが難しいと感じる。そこをいかに楽しい雰囲気を作りながらも保護者の方達の意識向上につながっていくかが課題であると考えております。」

このように, 《親とのコミュニケーション, 傾聴, わかりやすい説明》を意識し, 親を育てる支援につなげていこうとしている努力がうかがえる。

4. 考 察

研究協力者は、『組織の意義・運営のあいまいさ』が支援を行う上での課題・困難であるとしており、これが気になっていることのカテゴリーすべてに関連していると考えられた。以下、気になっていることの4つのコアカテゴリーを中心に、課題・困難との関係性について考察する。また、子育て支援センター職員を支える専門職の役割も合わせて考察する。なお、気になっていること、課題や困難と感じていることの関係性と専門職の役割を図4に示す。

1) 『実際には見えない母子』への支援について

厚生労働省の地域子育て支援拠点事業実施要綱によると⁹⁾、地域子育て支援拠点事業の基本事業は、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談、援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施(月1回以上)、とし、この4つをすべて実施することとして

いる。さらに、基本事業に加え、一時預かり事業、乳児家庭全戸訪問事業または養育支援訪問事業などを実施してよいとしている。研究協力者は、『実際には見えない母子』を気がかりとしており、『見えない母子へのアプローチ』が課題と考えていた。現状では、施設に訪れていない親子への支援は困難という記述があったが、各施設が、訪問事業などを地域子育て支援センター職員の業務としていくかどうかを検討し、母子を支える他の専門職者との役割分担を再確認することが必要であるとする。その役割分担を明確化した上で、地域子育て支援センターの職員とその他の母子保健専門職との連携・協働をはかることが、地域の子育て家庭に、より有用な支援になると考える。児童相談所における児童虐待相談対応件数は24年間で約80倍に増加し¹⁰⁾、A県においても相談対応件数が年間1000件を超えている¹¹⁾。地域子育て支援センター職員の『見えない母子へのアプローチ』の主体的な実践が、その予防的機能を果たすと期待される。よって、研究協力者が、日々の業務の中で『実際には見えない母子』を支援の必要な対象と実感していることを、支援に活かしていくことが必要ではないかと考える。

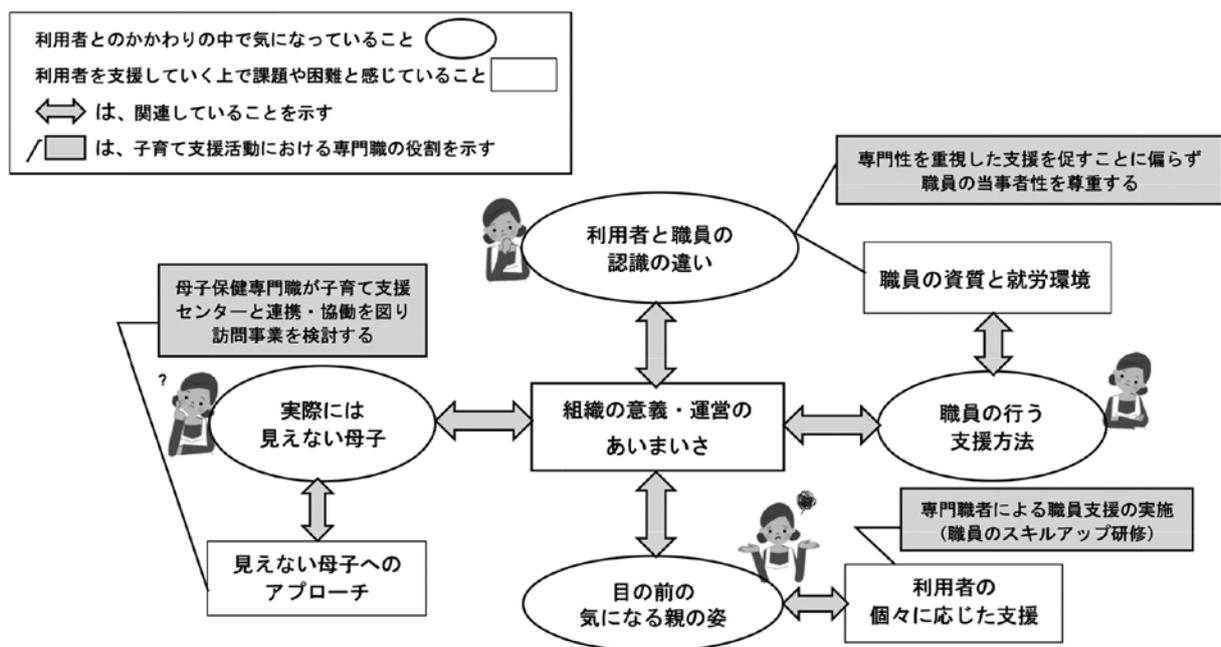


図4 「気になっていること」、「課題や困難と感じていること」の関係性と専門職の役割

2) 『目の前の気になる親の姿』について

研究協力者は、『目の前の気になる親の姿』から、『利用者の個々に応じた支援』が課題と考えていた。利用者には様々な背景や個別性があることも記述内容から伺え、職員はその対応に苦慮している。発達が気になる子どもとその親への関わりは、専門知識やソーシャルワーク力が必要とされる。親のマナーや利用者間のトラブルで困難が生じた場合、場をまとめるコーディネート力が求められる。さらに、少ない人員で、ニーズに合った子育て支援に関する講習やイベントなどを企画する、マネジメント力も必要となるだろう。このように、地域子育て支援センターの職員が個々に応じた支援を行うためには、あらゆる能力が必要とされていることが記述内容から理解できた。先行研究では、看護系大学教員が、利用者へ子育て講演会を行ったり、医療や育児の情報提供を行うことが親の育児ストレス軽減につながる可能性を示唆しており、専門職者による利用者支援が必要であることを述べている¹²⁾。本研究では、職員にあらゆる能力が求められている状況が見えたため、専門職者による職員支援の必要性が示唆された。職員のスキルアップのために我々専門職者が連携をとり、それぞれの専門性を活かして研修を開催するなど、職員に対して支援ができる体制を整えることが重要ではないかと考える。

3) 『利用者と職員の認識の違い』と『職員の行う支援方法』について

研究協力者は、利用者のニーズを最優先しすぎると、適切な支援、言わば、親育てという視点での支援が欠けるのではないかという思いを持ち、子育て支援の意義・目的を模索していた。よって、職員という立場から見た、支援の目的に関する『利用者と職員の認識の違い』が生じていた。安川(2010)は、職員に求められることとして、「専門性」と「子育ての当事者性」という2つの視点を挙げている。そして、「専門性が高まれば高まるほど、当事者を重視した関わりが弱くなるのが懸念される。専門性と当事者性は、両方が必要であると考えられるため、地域子育て支援拠点では、ある特定の専門職が担うとい

うよりは、多様な専門職や当事者との協働や連携が求められていると考える」と述べている¹³⁾。また、地域子育て支援拠点事業実施要綱によると⁹⁾、職員の選定基準は、「子育て親子の支援に関して意欲のある者であって、子育ての知識と経験を有する専任の者」とされ、資格保有の有無は問われていない。近年、利用者は、子育てや医療などに関する情報を多く有しているため、支援する側の専門性も求めがちであるが、当事者性こそが心の安寧を促進する有効な支援となるのではないだろうか。原口(2005)らは、「育児不安に対する支援を検討する際に、母親が子どもを産み育てることをどのように意味づけ、価値づけているかに注目することが重要であり、ひとりの人間として、女性として生きたいという母親の声に真剣に耳を傾け、母親の多様な生き方が認められるような体制作りを進めることが課題である。」と述べている¹⁴⁾。子育ての知識と経験を有する当事者性をもった職員は、利用者の生き方を認め、尊重できる、かけがえのない存在であると思われる。職員の当事者性を尊重することは、『利用者と職員の認識の違い』の改善につながるのではないだろうか。利用者をピアサポートするような関わりに視点をおくことは、利用者のニーズに合致し、かつ、親育ちにつながる支援を生み出すのではないかと考える。

5. 研究の限界

本調査は、質問紙の自由記述による質的記述的研究としたため、研究協力者の思いが十分に反映されていないことが考えられる。インタビューなどの方法を用い、今後発展させていく必要がある。

6. 結 論

A 県地域子育て支援センター職員の、利用者との関わりの中で気になっていること、および、利用者を支援していく上で課題や困難と感じていることを調査した。分析の結果、地域の子育て支援活動における専門職の役割が示唆された。

1) 研究協力者は、『実際には見えない母子』を支援の

必要な対象としてとらえていた。地域子育て支援センター職員とともに、来所しない親子への支援方法を検討する必要がある。

- 2) 地域子育て支援センターの職員が、個々に応じた支援を行うためには、多様な能力が必要とされていることが示唆された。地域子育て支援センター職員のニーズに合わせた、職員のスキルアップ研修を開催していくことが必要である。
- 3) 専門性を重視した支援を促すことに偏らず、職員の持つ当事者性を尊重していくことが、利用者への有効な支援につながると示唆された。

7. 謝 辞

調査にご協力いただきました、A 県地域子育て支援センター職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

8. 文 献

- 1) 人口推計，平成 28 年 4 月報，総務省統計局
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.htm>，2016.5.6 アクセス
- 2) 人口推計，統計トピックス No.89 わが国の子どもの数，総務省統計局，
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/topi890.htm>，2016.5.6 アクセス
- 3) 佐藤美樹，田高悦子，有本梓：都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因，日本公衆衛生雑誌，61(3)，121-129，2014
- 4) 望月由妃子，田中笑子，篠原亮次，他：養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連，日本公衆衛生雑誌，61(6)，263-274，2014
- 5) 地域子育て支援拠点事業実施のご案内：厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室，2007
- 6) 地域子育て支援センターガイドライン：三重県健康福祉部，2007
- 7) 平成 26 年度 地域子育て支援拠点事業実施状況：厚生労働省
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten_kasho26.pdf，2016.5.6 アクセス
- 8) 上野恵子，穴田和子，浅生慶子，他：文献の動向から見た育児不安の時代的変遷，西南女学院大学紀要，14，2010
- 9) 地域子育て支援拠点事業実施要綱：厚生労働省，平成 27 年 5 月 29 日通知
- 10) オレンジリボン運動公式サイト子ども虐待防止オレンジリボン運動，特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク
<http://www.orangeribbon.jp/about/child/data.php>，2016.5.6 アクセス
- 11) 子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第 11 次報告の概要）及び児童相談所での児童虐待相談対応件数等，平成 26 年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数（別添 2）：厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000099975.html>，2016.5.6 アクセス
- 12) 船越和代，大池明枝，三浦浩美，他：地域の子育て支援活動における看護系大学教員の役割—子育て支援センターを利用している乳幼児の母親対象の調査から—，地域環境保健福祉研究，10(1)，48-52，2007
- 13) 安川由貴子：地域子育て支援拠点事業の役割と課題—保育所・保育士の役割との関連から—，東北女子大学・東北女子短期大学紀要，53，79-88，2014
- 14) 原口由紀子，松浦浩代，矢倉紀子，他：母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連，小児保健研究，64(2)，265-271，2005

Roles of Experts in Local Child-rearing Support Activities

—A Survey Targeting Staff Members of Local Child-rearing Support Center in “A” Prefecture—

Yasuko SUGIYAMA, Masayo KOKUBU, Takahiro SUZUKI,
Eiko HASHIZUME, Yoko SUGIMOTO

Faculty of Nursing, Suzuka University of Medical Science

Key words: local child-rearing support, staff members, concerns, challenges, difficulties, experts, roles

Abstract

This study was aimed at examining how workers of the local child-rearing support centers fulfill their roles of experts in local parenting support activities by revealing the concerns they have as interacting with parents who use the facilities and the challenges or difficulties they face in supporting the parents.

The staff of a local childrearing support center in A Prefecture was examined for the study. Self-completion questionnaires were sent to 166 staff members of the facility upon their consent, and then were later collected. Those self-completion questionnaires were analyzed qualitatively and descriptively.

The concerns the staff members had through interaction with parents included the “parents’ questionable behaviors they confront”, “how the staff members support parents”, “differences in awareness between parents and the staff”, and “those mothers-and-children who never visit the facility”. On the other hand, the challenges and difficulties they faced in supporting parents included the “ambiguity of the significance and operation of the organization”, “the individualized support for parents”, “quality of the staff members and their working environment”, and “approach to the mothers-and-children who never visit the facility”.

The result suggested that supposedly, the roles of the experts are to continue examining the approaches to supporting parents and children who never visit the facility, giving the skill-up training for the staff members as well as valuing them for being a central player in the parenting support.

略 歴

杉山 泰子 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 助教

学 歴：

平成 27 年 三重県立看護大学大学院 看護学研究科 看護学専攻 修了

職 歴：

平成 21 年 三重大学医学部看護学科

26 年 現職

主な研究内容：

妊娠先行婚女性の看護

母乳育児の看護

母性看護学

助産学

その他の社会的活動：

一般社団法人三重県助産師会教育委員長

みえ母乳の会運営委員